

入院から在宅療養に移行した子どもの遊び支援（2）

—子ども同士のかかわりの発達に視点をおいて—

A case study of a special childcare class for the children with chronic diseases II

— With a particular focus on helping the children to develop relationships —

碓 氷 ゆかり *

Abstract

I started a special childcare class *Yurinoki-Gumi* in 2009 for those children with chronic diseases who are not admitted to a pre-school or a kindergarten and have been continuing it since then. Based on the records of two children (A, B) who were to be admitted to a preschool and a kindergarten next year, this study analyzes and discusses the change in their play and their relationships with other children with a particular focus on the development of their relationships.

A and B lived with a number of restrictions under medical supervision and had few chances to have relationships with other children before coming to *Yurinoki-Gumi*. But, joining *Yurinoki-Gumi* and spending time with other people, the two children gradually learned to express themselves, to develop good relationships with other children, and to share feelings through play. They grew to show sympathy with other children, particularly younger ones. That was remarkable growth for the two and seemed to serve them and their parents as a source of self-confidence and a good preparation for going to a preschool or a kindergarten.

キーワード：在宅療養、慢性疾患児、病弱児保育

1. はじめに

近年、慢性的な疾病や障害があり継続的な治療管理を必要とする子どもも家庭生活を送ることが可能となり、医療の目的は、治療を主体とした生命予後の改善から日常生活を視点にした QOL の向上へと変わりつつある（新平 2002、永井 2006）。

慢性疾患をもつ子どもは、長期にわたる入院生活や入退院のくり返し、あるいは病気による様々な制約を受けて生活をするにより、直接経験や運動経験の不足から、退行現象や社会生活への適応の遅れが見られるなど発達に弊害が起りやすくなる（小畑 1988、横田 1995）。乳幼児の場合、入院生活や在宅での療養生活のなかでは環境からの刺激が乏しくなりがちのため、特に言葉や人のかかわりについての発達が遅れることが指摘されている（広瀬 1995、馬場 1996）。

子どもは一般に、成長とともに、親とのかかわりから次第に同年代の子どもとのかかわりを求めるようになる。子ども同士の関係もひとり遊びから集団

での遊びへと変化を見せ、友だちと共に遊ぶことで人とのかかわり方を知り、そのなかで協調性や競争心、譲り合い、助け合い、思いやり、共感する感性なども育つ。時にはぶつかりあうなかで他者を知り、自己をコントロールすることや人とのかかわり方の基本を学んでいく。また、子ども同士で遊ぶことによって、言葉の使い方やコミュニケーションのとり方を知り、ごっこ遊びなどをとおして買い物の仕方、ごはんの作り方、順番交代、役割がもつ特性など、社会のなかで生きていくために必要な社会的ルールや行動様式を身につける。このように、子どもの社会性は子ども同士のかかわりから育まれる。

しかし入院児の場合は、年齢が幼いほど不安や寂しさから子どもよりも大人（母親や保育士など）とのかかわりを求める傾向にあったり、病状によっては他児との接触が制限されるため、他児から受ける刺激が乏しくなり、子ども同士でのかかわり方が身につけにくくなる。退院後も、引き続き在宅にて療養生活を送ったり、入退院をくり返す場合や、感染症に罹ってはいけないうえに集団の中に入ることが

* Yukari USUI 聖和短期大学

できない場合、あるいは疾患の状況によっては医療的ケアが必要なために幼稚園や保育所側から受け入れができないと言われた場合などは、家の中に閉じこもりがちになってしまう。そのため、幼稚園や保育所等の集団生活を経験することなく就学にいたることもある（鈴木 2005）。

このように、同年代の子どもと遊ぶ機会が少なく、大人と遊ぶことに慣れてしまうと、受け身で依存心が強くなり、自律性が育ちにくく、集団生活に入った際に新しい人間関係に適応できないなど様々な弊害が起こってることが懸念される。

筆者は、慢性疾患をもち一般の保育施設に通うことができない子どもたちを対象に、2009年度より関西学院聖和幼稚園の協力の下、病弱児保育クラス【ゆりのきぐみ】を設置し、保育を行っている。開始当初は3名のクラスであったが、2010年度には6名になり、子どもたちが遊びや集団保育を通して様々な経験をし、子ども同士のかかわりを広げていっている（碓氷 2009）。

本稿では来年度他園に就園予定の2名の子どもの保育記録から、子どもたちの社会性、とりわけ子ども同士の関係に視点をおき、遊びや子ども同士の関係の変化について分析し、考察する。

2. 方法

- 1) 対象児：【ゆりのきぐみ】の6名のうち、次年度に就園予定の2名A・B（どちらも3歳、女児）
- 2) 期間：2009年6月～2010年12月（月に2、3回）
- 3) 方法：2名の保育記録の分析・考察を行う。
- 4) 対象児について

A児：先天性心疾患

2009年3月まで在宅酸素療法¹⁾を行っていたが、同年4月、経過が良好で酸素療法を終える。

日常生活においては、内服薬の影響により、ケガによる出血に気をつけることが必要で、また「風船をふくらませる」などの息を止めるような行為は禁止されている。

【ゆりのきぐみ】に参加するまでは近所の公園や児童館などに行っていた。【ゆり

のきぐみ】に参加してしばらくの後、週に数回、近所の幼稚園の就園前保育に参加するようになった。

B児：先天性心疾患

【ゆりのきぐみ】に参加した当初から在宅酸素療法をしており、幼稚園でも経鼻カニューレを装着していた。約半年後、就寝時のみ酸素療法を行うようになる。

日常生活においては、内服薬の影響により、ケガによる出血に気をつけることが必要である。

【ゆりのきぐみ】に参加してしばらくしてから、週に数回、近所の幼稚園の就園前保育に参加するようになった。

3. 倫理的配慮

【ゆりのきぐみ】参加申し込みの際に、プライバシーに配慮することを約束した上で、本プログラムについて学会等で報告を行うことについて同意を得た。

4. 結果と考察

【ゆりのきぐみ】を設置して約1年半の記録から、2人の遊びや子ども同士の関係の変化についてまとめた。

1) 開始当初から半年

事例1（初回 2009年6月）

※開始当初、AとBは2歳

Aが母親と手をつないで登園してくる。母親が靴を脱がせ、母親と手をつないで階段を上がってくる²⁾。

挨拶を交わし、保育者と母親が普段の状況などについて話している間、Aはずっと母親の後ろに隠れるようにしている。保育者が「おもちゃで遊んでいいよ」と声をかけるが、母親と離れにくい様子。Aは母親に促されて、木のおもちゃに次々に触れてみるが、どれも触れるのが初めてでうまく使いこなせないからか、すぐにやめてしまう。母親が「こうやるんじゃない？」として見せるが、

1) 低酸素血症を防ぐため、家庭において持続的に酸素吸入を行うこと。参加した2名は両側鼻腔にカニューレを装着して酸素吸入を行っていた。

2) 【ゆりのきぐみ】の活動は、幼稚園の2階にある図書コーナーで行っている。

あまり興味を引くものではないのか、Aは無関心な様子で、何をして遊ぼうか探索するように辺りを見回す。

保育者が「お料理もできるよ」と木製のままごとの食べ物を木の包丁で切ってみせると、Aは興味をもった様子で、すぐに手を出してきて保育者から包丁を受け取り、次々に野菜を包丁で切り、切れるたびに満足そうな顔をする。

少し遅れて、Bが母親と手をつないで階段を上がってくる。挨拶を交わし、保育者と母親が話していると、BはAがままごとの野菜を切っているのを見て、すぐに同じようにAの横に座って始める。Bが始めたことで、Aは他のおもちゃで遊ぼうと辺りを見回し、『ポストボックス』を見つけて木片と同じ形の穴を探して入れようとする。同じ形を見つけることができ、保育者が「できたね」と声をかけるとうれしそうな表情を見せ、〈(先生も) どうぞ〉と一つずつ保育者に木片を渡してくる。

次に、Aが『シロフォン・クーゲルバーン』で遊び始めると、Bがシロフォンの音にすぐに気付く、側にいって一緒に玉を入れ始め、2人で交互に何度も入れていく。Aが『シロフォン・クーゲルバーン』の玉を持って、テーブルの方に行ってテーブルの上を転がし始めると、Bも同じように玉をもってきて転がし始める。テーブルの真ん中にあいた穴から落ちる様子がおもしろらしく、2人で何度も繰り返す。

事例2（2009年9月）

登園してきたBに保育者が「ままごとおいてるよ」と声をかけるとままごとのセットのほうに走っていき、早速、小さい木製の野菜を手にとってフライパンに入れていく。山盛りになるとフライパンごとひっくり返し、それを何度かくり返す。側においていた野菜や果物を見つけると、木の包丁で切り、『ミニキッチン』のシンクに入れていく。

学生³⁾が「Bちゃん、これも切って」と野菜を渡すと、次々に切ってシンクに入れていく。

Aは登園してくると、Bがままごとをしている

のを見て、すぐにBの横に行って『ミニキッチン』の所で野菜を切ったり、鍋やフライパンに入れて料理を始める。

保育者がティーカップに『ボタンビーズ』を入れて「Aちゃん、どうぞ」と言うとAは飲む真似をし、Aもお椀に『ウッドチップ』を入れて保育者に〈どうぞ〉と渡す。保育者とAがやりとりをしているのを見て、Bが入ってきて『ウッドチップ』を箱に入れてひっくり返し、Aが持っていた『ボタンビーズ』も触ろうとする。Aが〈やめて〉と言うと、BはAをつきとばそうとし、保育者が止める。保育者が2人に「一緒に使おうか」と言うが、2人はそれぞれティーカップに『ボタンビーズ』を入れて保育者や母親に持っていく。

事例3（2009年10月）

外遊びに出て、3歳児クラスの園児たちが、たらいにためた水をペットボトルやじょうろですくっていると、Aも側にあったシャベルを持って水をすくってどんぐりや木の実が入ったカップに入れ、混ぜていくのを見てうれしそうな表情をする。側を通った園児が『手押し車』を押しているのを見て、〈あれしたい〉と言って空いている『手押し車』を見つけて、持っていたシャベルを乗せて押し始める。押しながら園庭を歩いていると、他の園児が『キックボード』をこいでいるのを見て、次は『キックボード』がしたくなり、その園児のところに行って乗ろうとする。その園児と取り合いになりそうになり、保育者が「貸してって言うてみたら？」と言うが、言わずに乗ろうとする。学生も「あっちにトンネルがあるからトンネルに行こう」と違うものに気持ちを向けようとするが、『キックボード』がしたい気持ちのほうが勝っており、〈イヤ〉と意思を通そうとする。その園児があきらめて『キックボード』を渡すと、そのままこいでいこうとするので、保育者が「ありがとうって言おうか」と言うが、こぐのに一生懸命になっている。代わりに保育者が譲ってくれた子どもに「ありがとう」と言うが、Aは気づいていない。Aは『キックボード』をこごうとするが、うまくこぐことができず、保育者が前から引っ張るようにすると、ようやく進み始め、

3) 本プログラムには、ほぼ毎回、学生（1～4名）がボランティアで参加している。

そのままこいでいく。

一方、Bは3歳児クラスの園児たちが『フラフープ』を回している側に行きつと見る。学生が「Bちゃんもしたいの?」と聞くが、フープを回している子どものほうをじつと見たままでいる。その横を園児が『キックボード』をこいで通ると、今度は『キックボード』が気になり、追いかけるが、〈貸して〉と言うことができず、言いそびれている間に園児は行ってしまふ。

Bは『キックボード』をあきらめ、砂場に行き、3歳児クラスの園児たちに交じってスコップで砂を掘り始める。周囲の園児がペットボトルに水を入れてもってきたり、手押し車に砂を入れたり、ままごとをしている様子を見て、ままごとをしている子どもに声をかけようとするがかけられずにいる。母親も保育者も何も声をかけずにじつと見守っていると、側に置いてあった手押し車を砂場に入れてスコップで砂を入れ始める。

事例4 (2009年11月)

Bが母親と登園してすぐに『ベタベタブロック』を組み合わせて遊んでいると、Aが母親と階段を上がってくる。保育者と学生が「Aちゃん、おはよう」と呼びかけると、Aも元気よく〈おはよう!〉と笑顔で答える。Bが遊んでいるのを見て一緒にブロックを組み合わせ始める。BもAが来て笑顔になり、それぞれブロックを組み合わせて見せ合う。Aはいくつか組み合わせると、ままごとのほうを見て〈ままごとする〉と走っていく。『ミニキッチン』の横においてあった『ウッドチップ』と『ボタンビーズ』を箱ごとひっくり返してシンクに入れ、スプーンで1つずつすくってお皿に入れていく。保育者が一緒にお皿に入れると、保育者に〈はい、どうぞ(食べて)〉と渡し、保育者が食べる真似をするとうれしそうな表情をする。保育者がBに「Bちゃんもどうぞ」と渡すと、Bはうれしそうな表情をして受け取り、飲む真似をする。するとAも『ボタンビーズ』をカップに入れてBに〈はい、どうぞ〉と渡し、Bはうれしそうに受け取って飲む真似をする。次にBはカップに『ボタンビーズ』を入れてAに渡し、Aもうれしそうに受け取って飲む真似をする。

【考察1】

2人とも日頃から母親と遊ぶことが習慣になっており、園でも常に母親や保育者、学生と遊ぼうとする傾向が見られた。

互いに相手が先にしている遊びに興味をもち、真似をしてやってみようとする姿も見られたが、2人の交渉はなく、BがAの側に行きつとままごとをしようとするAが離れてしまったり、Aがしている物にBが触ろうとするとAが嫌がって喧嘩になりそうになるなど、それぞれがしたいことをし、一緒に遊ぶという状況ではなかった(事例1、2)。事例3のように、園児がしていることにも興味をもつが、物の貸し借りの仕方や遊びへの入り方がわからず、じつと見ているだけであったり、貸し借りの交渉をせずに園児が使っている物を使ってしまふ場面も見られた。そこで保育者は、まず[2人のかかわり]のなかでそれぞれが自分を出し、相手の気持ちを知ることができるようになっていくことが大切であると考え、保育者が仲立ちをしながら子ども同士のかかわりを促した。徐々に2人はままごとや砂遊びなど同じ遊びを共有し、物を介した[2人でのやりとり]ができるようになった(事例4)。

このように、2人とも同じ場で過ごしているうちに、互いのことを意識し、模倣をしたり、物を介したやりとりができるようになり、一緒に遊べてうれしいという意識が芽生えてきたと推察される。

2) 開始から一年

事例5 (2010年6月)

※AとBは3歳

Bはままごとで『ウッドチップ』や『ボタンビーズ』をお鍋に入れて料理をする。お鍋に入れたものをぐるぐるとかき混ぜているときに、学生が「おいしそうね」と声をかけると、料理したものをお椀に入れて〈はい(どうぞ)〉と学生に渡す。

Aはしばらくパズルをした後、ままごとを始め、コップに『ボタンビーズ』を入れて周囲にいた学生に〈はい〉と渡していく。保育者がBと一緒にままごとをするように促してみるが、それぞれ学生を相手にやりとりをする。

外遊びの時、Bは学生と一緒に小屋に行き、先に遊んでいた園児たち(年長の女児)がしている

ままごとを見て同じようにしようとする。Bが、園児がやかんから水をコップに入れたり、他の園児がお鍋に砂と水を入れて混ぜているのを見ると、園児のほうから〈(お水) 入れる?〉と声をかけてもらい、自然と園児の遊びに入っていく。

Aも学生に誘われて小屋に来る。園児がコップに花びらと水を入れてかき混ぜ、ジュースを作っているのを見て、〈Aもする〉と言ったので、保育者が園児に「(Aちゃんも) 一緒にしてもいい?」と聞くと、園児は〈いいよ〉とAにコップを渡し、Aは園児がしているのを見ながらジュースを作っていく。保育者が「おいしそうね」と言うと、Aは〈はい、どうぞ〉と保育者に渡し、保育者が飲む真似をして「おいしい」と言うと、満足そうな顔をする。保育者が「Bちゃんにもあげたら?」と言うと、AはBにもジュースを渡し、Bもうれしそうな表情で受け取り、飲む真似をする。Bの表情を見て、Aもうれしそうにする。

事例6（2010年6月）

保育者が絵本を見ることを呼びかけると、それぞれ母親に促されて前に集まる。保育者が絵本を読み始めると、AとBはじっと集中して見る。

絵本が終わると、Aが他の絵本を持ってきて読む（真似をする）。それを見てBも適当に絵本を選んで持ってくる。Aが読んでいる（真似をしている）間、他の子どもたちはじっと見ている。Aが読み終え、母親たちが「すごいね」などと手をたたくと、Aは満足そうな顔をする。Bも絵本を読む真似をするが、Aのようにうまくページをめくりながら読めないことがもどかしい様子で途中で止めてしまう。

おやつ時間、保育者が「お手伝いしてくれるかな?」と呼びかけると、Bがお皿を並べたりおやつを入れるのを手伝う。保育者が「Bちゃん、上手にできたね。ありがとう」と声をかけると、うれしそうな表情をする。それを見ていたAも、〈Aもお手伝いする〉と保育者に言って手伝う。

おやつを食べ終え、保育者が「お片付けしようか」と言うと、Bが自分のお皿を持ってくる。保育者が「ありがとう」と言うと、Aも他の子ども

の分もお皿を持ってくる。

事例7（2010年7月）

幼稚園が行っている就園前の子どもを対象とした保育に参加した日。

園の先生が紙芝居を読み始めると、他に大勢の子どもたちがいる中、AとBは2人で並んで座り、うれしそうな表情をしながら紙芝居を見たり互いに顔を見合わせて笑ったりする。紙芝居が終わると、七夕飾りの色紙の三角つなぎや四角つなぎを作り始める。Aが次々に糊で色紙を貼ってつないでいくと、Bもそれを見ながら次々に貼っていく。Aが10枚ほどつないで〈できた〉と言って保育者に見せると、Bも〈できた〉と言って保育者に見せる。

【考察2】

開始から約1年が経過し、AとBは同じ場で遊びながらも母親や保育者と一緒に遊びたがり、なかなか自分たちからかかわり合おうとしなかった。しかし、保育者が外遊びの時などに園児の遊びに参加するようはたらきかけると、2人は園児のままごとに加わって物のやりとりをするなどして遊ぶことができた（事例5）。このように、まだ2人だけでは互いに積極的にかかわりをもとうとはしないため、保育者がきっかけをつくることも必要であると考えられた。

また事例6のように、Aが保育者の真似をして絵本を読むとBも同じように真似ようとしたり、Bが進んで手伝いをするとAも同じようにするなど、それぞれが互いを意識し、周囲から認められたいという気持ちの強くなっていることが窺えた。このように、2人とも母親に依存しがちであった状態から少しずつ自分で考えて行動できるようになってきていることが認められた。

2人の関係は1年の経過のなかで徐々に近くなり、大勢の子どもたちの中で絵本や紙芝居を見る時には隣同士座って一緒に見て、おもしろい場面が出てくると互いに顔を見合わせて笑うなど、共感している様子が見られ（事例7）、2人の間で互いに相手を「友だち」という意識をもち、一緒にいることが楽しいという気持ちになっていることが推察された。

3) 開始から一年半

事例8 (2010年10月)

※CとDは2歳(2人とも男児)

保育者が「おやつにしようか」と呼びかけ、Aに「お手伝いしてね」と言うと、お皿を並べたり、おやつのお皿をお皿に乗せる。保育者が「CくんとDくん、呼んであげて」と言うと、Aは恥ずかしそうにしながら「おやつですよ」と2人を呼びに行く。

外遊びに出る時、AとBはさっと靴をはきかえると、外に出ずに玄関でじっと待っている。保育者が「どうしたの? お外行っていいよ」と言うと、2人とも他の子どもたちが母親に靴をはかせてもらうのを待っている様子。保育者が「みんなで行きたいんやね。」と言うと、2人ともうなずく。

事例9 (2010年10月)

※Eは2歳(男児)

お芋掘りの日、初めて参加したEが環境に慣れない様子でぐずっている。

園の裏にある畑でお芋掘りをする間、保育者がぐずっているEに落ち葉を見せたり、掘ったお芋を持たせるなどすると、少し慣れて笑顔も見られるようになる。Eと家が近く、一緒に遊んだこともあるBは、Eのことが気になっている様子で、頭をなでたりする。

お芋を掘った後、Eの母親がEをベビーカーに乗せて園に戻ろうとすると、Bがベビーカーを押そうとする。Eの母親が「Bちゃん、押してくれるの?」と聞くと、Bはうなずいて園まで押していく。

事例10 (2010年12月)

クリスマスのリースを製作していると、Aはある程度作って納得したのか、「Aちゃんはパズルしよう」と一人でパズルを始める。一人でパズルをするところを見ていてほしいらしく、途中で保育者を誘いに来る。パズルを仕上げると、「次はままごとしよ」と保育者の手を引いていく。保育者が「何作ってくれるの?」と聞くと、「お料理

するの」と野菜や果物をお鍋に入れてかきまぜる。お料理ができあがると、お椀に入れ、「先生にあげる」と言って保育者に渡し、保育者が食べる真似をして「おいしい! 次はママに作ってあげようか」と言うと、Aは「うん、ママにつくったげる」とまた作ってお椀に入れ、母親に持っていく。

Bもままごとのところに来たので、保育者が「Bちゃんもお料理する?」と聞くと、「うん」とうなずいて包丁で野菜を切り始める。AとBが「きゅうり切ろう」「大根切ろう」などと会話をしながら料理をする。保育者が「次は何作ろうか?」と尋ねると、Aが「次はデザート」と言ってケーキを切り、Bもケーキを切る。そこへCも来て、3人で料理を作り始める。ごっこ遊びまではいかないが、初めて3人で会話をしながら同じ遊びをする。

保育者がリースを作っている母親たちに「3人で遊んでますよ」と言うと、母親たちはそっと見て「ほんとだ」とうれしそうに笑って見守る。

保育者がAとBを呼び、「そろそろおやつの時間だけど、そっとおやつを用意してママたちを呼ぼうか」と言うと、2人はうなずき、2人でお皿とおやつを準備する。Cもお皿におやつをのせるのを手伝う。

おやつが準備ができ、保育者が「じゃ、ママたち呼んでこようか」と言うと、AとBが「おやつですよ」と大きな声で母親たちを呼ぶ。母親たちが来て、それぞれの場所に座り、保育者が「今日は3人がおやつを用意してくれました」と言うと、母親たちはうれしそうな表情で子どもたちに「まあ、ありがとう」と言い、みんなで「いただきます」と言って食べる。

【考察3】

開始から約1年半が経過し、2人ともおやつと同じ【ゆりのきぐみ】の子どもの分も用意したり、外遊びに出る時に他の子どものことを待つなど、仲間のことを考えた行動がとれるようになった(事例8)。またBは、初めて参加したEが泣いているのを見て慰めたり、Eが乗っているベビーカーを押すなど、自分より年下の子どものことを気かけ、思いやる姿も見られた(事例9)。これまで自分を中

心に行動していた2人にとって、他の子どものことを思いやるような行動がとれるようになったことは大きな成長だと考えられた。

また短時間であれば、大人と一緒に遊ばなくても、たどたどしいながらも子ども同士でままごとやパズルなどをして遊べるようになってきた（事例10）。この日、学生ボランティアはおらず、保育者1人だけだったが、子どもたちは3人で会話をしながら一緒に遊ぶ様子が見られた。特にBの声がよく聞かれ、互いに名前を呼び合ったり、Cも仲間に入れて一緒に遊ぼうとする姿も見られた。母親たちに内緒でおやつを準備をしたことも楽しかったようで、笑顔で素早くお皿を並べたりおやつをお皿に乗せるなど、ワクワクした表情でおやつを準備している様子が見られ、子ども同士の関係が深くなってきたことが認められた。これまで、保育者や学生と一緒にいたことで気づけなかった姿を見ることができ、子どもたちは発達的にも子ども同士で遊べるようになってきていると推察された。

このことから、大人がいることでかえって子ども同士のかかわりを妨げてしまうこともあり、子ども同士のかかわりが変化していく過程において、子どもたちの様子を見守りながら、適切な援助を行うことが必要であると考えられた。

全体の考察

本研究は、病弱児保育クラス【ゆりのきぐみ】に参加した2人の子どもたちの社会性、とりわけ子ども同士の関係に視点をおいて、遊びや子ども同士の関係の変化について分析し、考察を行った。

AとBは、【ゆりのきぐみ】に参加するまでは、医療的な配慮が必要なために様々な制限のあるなかで生活してきており、他の子どもとのかかわりをもつことがほとんどなかった。

しかし、2人とも【ゆりのきぐみ】に参加して共に過ごすうちに、徐々に自分自身を発揮しながら、子ども同士でのかかわり方を知り、遊びを通して気持ちを共有するようになった。このことは、2人で笑顔で顔を見合わせる場面がよく見られるようになり、友だちと一緒にいることが楽しいという表情を見せるようになったことから窺うことができた。また、同じクラスの子どもや年下の子どもに対する思いやりを見せるようになった。これらのことは、2人にとって大きな成長であり、就園に向けて子ど

も自身や保護者の自信にもつながったのではないかとと思われる。

さらに、園庭で園児が四季折々の自然物を使って遊んでいることを真似てみたり、園児の遊びに参加するなどして様々な刺激を受けたことも、2人にとって「2人だけのかかわり」から「他児とのかかわり」に広がる機会となったと考えられる。

小畑（1988）は、「直接経験の不足は病気から二次的にもたらされたものであり、子どもの心理状態や、環境等に対する教育的配慮によって、かなりの改善が期待できることが多い」と述べている。慢性疾患児は長期入院や入退院の繰り返しなどによって直接経験が不足しがちであるため、退院後、在宅療養中の日常生活をいかに過ごすかが、その後のQOLにかかわってくるのが推察される。そのため、慢性疾患をもつ子どもが社会とつながり、様々な経験をつんでいくことができるような環境づくりが必要である。

AとBのように、一般の保育施設に通うことなく在宅で療養している慢性疾患児が社会性を身につけ、子ども社会のなかで生活していくためには、子ども同士がかかわりをもてるように保育者が意図的にはたらきかけることも大切であると思われ、今後も【ゆりのきぐみ】の子どもたちの将来を見通したかかわりを行っていきたい。

参考文献

- 馬場一雄(編) 1996 小児看護学[1] 医学書院
 広瀬幸美 1995 先天性心疾患乳幼児を育てる母親のニーズに関する研究 神奈川県立衛生短期大学紀要 28 37-45
 永井利三郎 2006 在宅医療とQOL 船戸正久・高田哲(編) 小児在宅医療支援マニュアル メディカ出版
 新平鎮博・木村佳代 2002 慢性疾患をもつ子どもと遊び 世界の児童と母性 52 42-45
 小畑文也 1988 子どもの発達と病気 山本昌邦(編) 病気の子どもと理解と援助 慶應通信
 鈴木茂 2005 病気の子どもと教育—入門テキスト—全国病弱教育研究会
 碓氷ゆかり 2009 入院から在宅療養に移行した子どもの遊び支援—病弱児保育の実践— 聖和論集 38 11-17
 横田裕・小野純平 1995 一般慢性疾患児の生活経験の不足に関する一考察 特殊教育学研究 32(5) 51-56

付記

本論文は、日本保育学会第64回大会（2011）にて発表

を行ったものに加筆・修正したものである。

本プログラムは、関西学院聖和幼稚園での就園前の子どもを対象とした子育て支援プログラムの一環として幼稚園園長のご協力を得て行った。